

## G1～9 一斉読書（国語）

10月20日（日）2校時、全校で一斉読書（本は学級毎）を行いました。児童生徒の感想（一部抜粋）は以下のとおりです。小学部は読み聞かせを中心に、中学部は、自ら読書し感想文を書く内容でした。全校一斉で読書に取り組み、読書の習慣を付けられるように工夫しています。



『いのちをいただく』

### G1 児童の感想

ぼくは、動物や植物・花など様々な食べ物をいただいているから、動物や植物、花などを大切にしたいです。命をいただくので、動物や植物を食べたくない気持ちはわかります。でも、食べないと僕たちは生きていけないので、食べるしかないと思いました。いつも感謝の気持ちを込めて「いただきます」のあいさつを必ずすればいいと思いました。そして、ご飯を粗末にするのはいけないと思いました。動物を粗末にするのはいけないと学びました。



『よかったな、かあちゃん』

### G2 児童の感想

『三人ともやさしいな』わたしが、この本を読んで思ったことは、三つあります。

一つ目は、三人ともさいしょは、サッカーをベンチの前であそびたかったけど、おじいさんからおばあさんの話を聞いて、かわいそうだなーと、気もちがかわったところです。人の気もちをわかってあげて、やさしいなど、思いました。

二つ目は、おばあさんが赤ちゃんにもどったのが、びっくりしました。わたしは、ほんとうにそうなっちゃうのかな？と思いました。

三つ目は、ひろきくと二人がさいごに、「かーちゃん。」と言ってあげたのが、やさしいなと思いました。



『花さき山』

### G3 児童の感想

わたしは、我慢すれば一つ花がさくというのがすごいと思いました。がまんして、そうしたかわりに、花ができると思えば、いろいろなことができるような気がします。「花さき山」を読んで、自分より他の人たちを助けたい。そういう気持ちが優しいと思いました。これからは、わたしもどんどん心の中に優しい花をさかせたいです。

## G4 児童の感想



『山のいのち』

ぼくは、おじいちゃんはすごいと思いました。森の中に一人で暮らしているからです。ぼくだったら、町で暮らすけど何で森の近くの何もないところで暮らしているのか気になりました。人間がイタチを殺してイタチの肉で魚をとるのは、一石二鳥だと思います。イタチで魚をとるのをやってみたいです。おじいちゃんが言っていた「森は命の回るところだ」というのは、命は大切に食べ物はそまつにはいけないことを伝えたかったのだと思います。ぼくも、食べ物をそまつにしないようにしたいです。日本人は食べる時に「いただきます」と言います。それは、命をもらいますと感謝しているのだと思いました。食べ物は、のこさず食べないといけないと思いました。

## G5 児童の感想



『蜘蛛の糸』

ぼくは、この本を読んでとても上品な言い方をしているなと思いました。また、漢字の使い方にも秘密があると思いました。「ぶつりと音を立てて断(き)れました」の所では、御釈迦様は「せっかく助けてあげようと思ったのに、なんて自己中心的なんだ」と感じたと思いました。また、カンダタが糸を「自分だけの物」と言ってしまったのが、糸が断れた原因だと思いました。この本を読んで、たとえ命を助けたとしても、自己中心的になることはいけないという事が分かりました。

## G6 児童の感想



『注文の多い料理店』

ぼくがこの本を読んで感じたことは、いつも山の動物を狩るのを楽しんでいる二人を山猫たちが仕返ししようとしたのだということです。最終的に山猫は二人を食べてしまうことはできませんでしたが、恐さのあまり顔が元に戻らなくなっていました。この作品を通じて、宮沢賢治さんは、動物たちがどのような気持ちで料理されているかを表したかったのだと思います。普段食べている料理に使われている動物たちにも命があって、その命をいただいていることを実感してほしいのだと思います。





『未来いそっぷ』

## G7 生徒の感想

私は未来いそっぷを読み、時代の変化を考えました。たとえば「アリとキリギリス」だと、働き者だったアリが怠け者になってしまったりしています。登場人物は動物ばかりですが、とても人間らしく、人間がどのような感情をもっているのか、ただかしくいだけでは得はできない。現代の社会の様子がとても表れていると思いました。また、このようなショートショートは手軽に、短い時間で読めるので、いいと思いました。私は、内容が重い本が好きですが、このような短い作品でも、面白いし、ためになることがあると知ることができて良かったです。星新一さんは、名前は知っていたけど、本を読んだことがなかったので、他の本も読んでみたいと思いました。

## G8 生徒の感想



『きみの友達』

「ねじれ」という言葉が印象的だった。友達でも赤の他人でもない不思議でなんともいえない関係。何回も転校を繰り返していると「ねじれ」の関係はよくある。友達でも赤の他人でもないそんな関係を私自身も何回か経験したことがある。きみと絵美ちゃんやブンちゃんと中西くんのような、にくんでいるのだけれど心のどこかで共通点や友達になりたい、私たち二人は似ているのかもしれないと、にくしみと明るい希望が入り交じった気持ち。私はそんな彼らの関係や強くつきはなしてしまう言動にとっても共感した。

私は主人公のきみがいった『友達になる5分前』というセリフを覚えておこうと思う。なぜこのセリフなのかという理由は、特にないが、私はこの5分前が5、6年生、中高生にとって一番憂うつな時間でこれからまだまだ長い私の人生の中で私の前に一番立ち足はだかってくる気がするからだ。

## G9 生徒の感想



『トットちゃんとトットちゃんたち 1997-2014』

私がこの本で特異だと感じた点は、いたる所に被害者や死者数を明確に書いてあるところです。それでいて、子ども達が経験してきた凄絶な過去も書いてあるので「これだけの数の人がこんな思いをしているのか。」とイメージしやすかったです。

考えさせられた点は、最後に筆者が言っているように、小さい頃に親を亡くし人殺しをさせられた子ども達より、物質的に豊かで平和な環境で育つ場合が多い日本人の子どもの方が、自殺率が高いことです。

私が思うに、その違いは「実際に死に直面したことがあるか」です。日本は比較的治安がよく、殺害現場を目撃することや、殺害未遂の被害を受ける可能性はシエラレオネや南スーダンと比べれば低いでしょう。その反面この文章で取り上げられている子ども達は命からがらに何とか生き残った人達です。私自身含め、私達日本人は「生きること」という選択肢を戦わずして享受できるということがどれだけ恵まれているのか十分に理解していないと思います。

この子ども達の話を読むことによって、戦争の悲惨さに触れるとともに、「生きている」ということの素晴らしさを少しわかったと思います。